

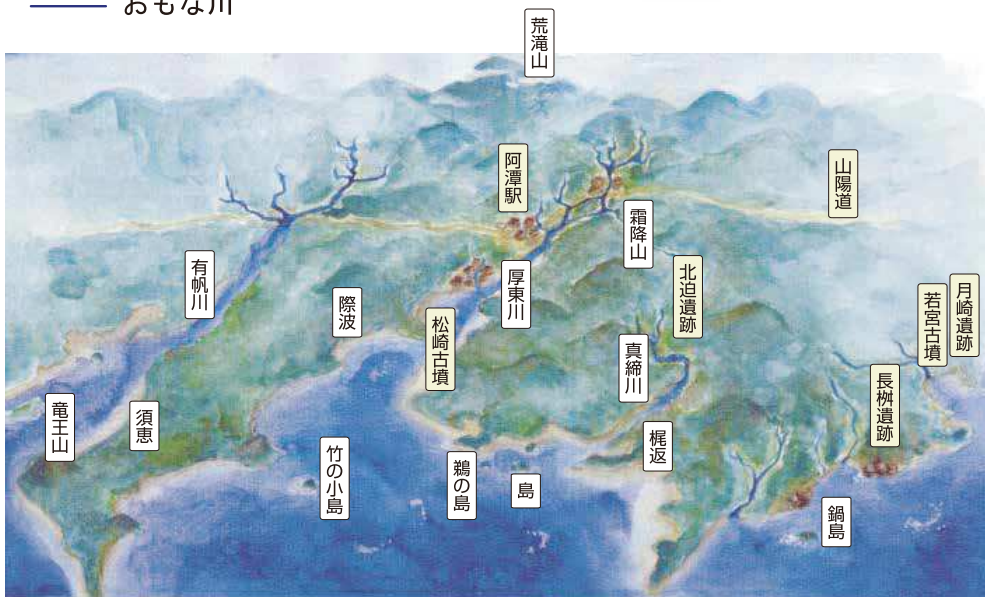
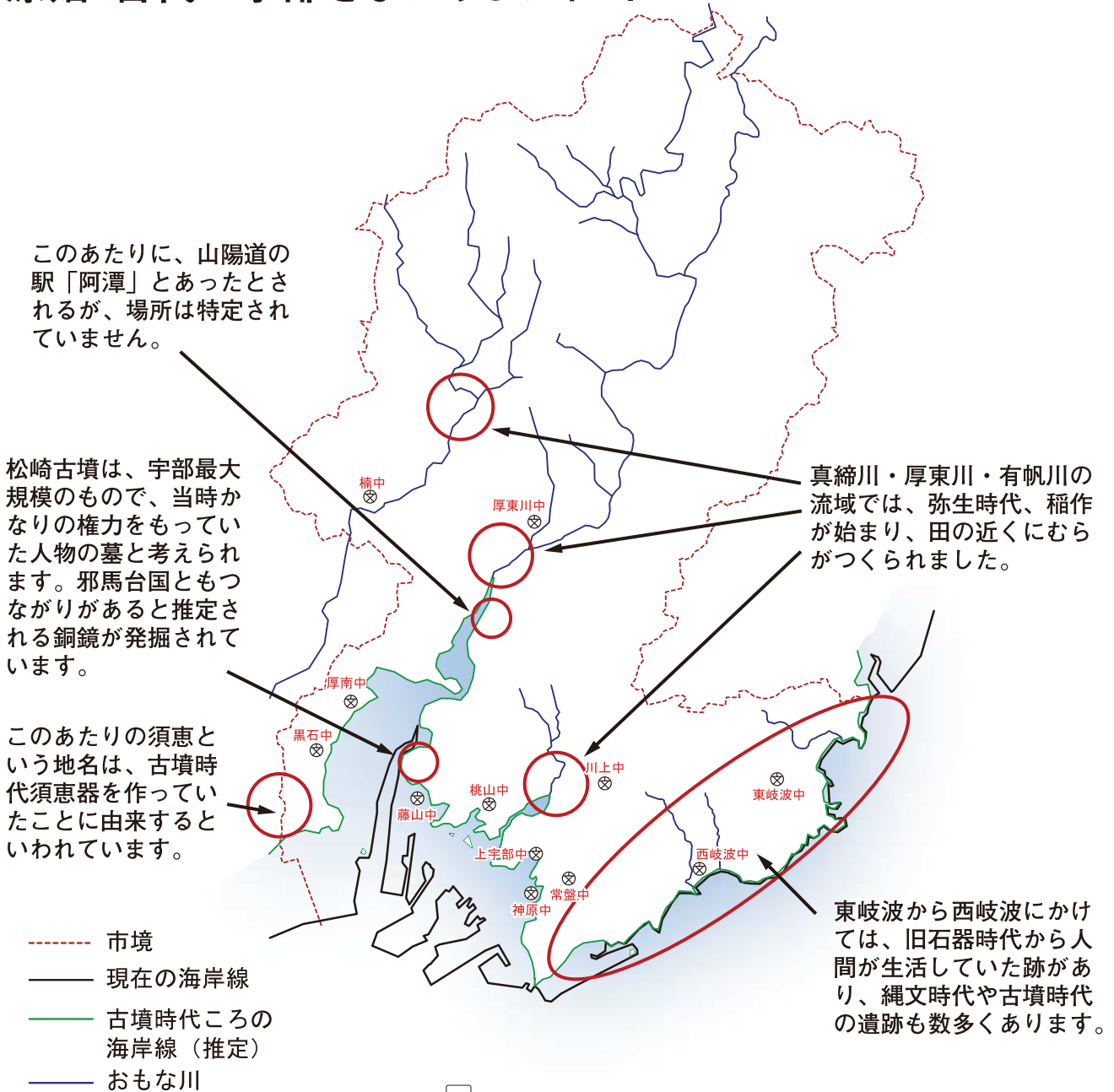
1 宇部の原始・古代はどのような時代だろうか

◎学習課題

- ・日本全体のできごとが、宇部でどのような具体的なようすとしてあらわれているだろうか？
- ・この時代はどのような時代といえるだろうか？

		宇部のできごと	歴史上のおもなできごと
原始時代	旧石器時代	約2万年前●常盤池周辺や長枿(西岐波)に人間の生活の跡が残っている	
	縄文時代	約1万年前から●月崎(東岐波)に縄文人の生活の跡が残っている	狩猟や採集によって生活する 稲作・金属器の使用が始まる
弥生時代	1世紀	●真織川沿いの南側や北迫(川上)に弥生人のむらができる	57■倭の奴の王が漢に使いを送る
	2世紀	●厚東川沿いの諏訪ノ原(厚東)にむらができる	239■邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送る
	3世紀		
	4世紀	●松崎(藤山)に大規模な古墳がつくられる	■このころ、倭が高句麗と戦う
	5世紀		478■倭王武が中国の南朝に使いを送る
	6世紀	●須恵器や生産や製塩が行われるようになる	■百済から仏像・経典がおくられる
飛鳥時代	7世紀	646●改新の詔によって長門の国が成立 685●「山陽道」の名が初めて文献に現れる	593■聖徳太子が摂政となる 607■小野妹子を隋に送る 630■第1回遣隋使を送る 645■大化の改新 663■白村江の戦い 672■壬申の乱
	8世紀	天平年間●「厚狭郡」の名が初めて文献に現れる	701■大宝律令 710■都を奈良(平城京)に移す 743■墾田永年私財法 784■都を京都(長岡京)に移す 794■都を京都(平安京)に移す
	9世紀		802■坂上田村麻呂が胆沢城を築く 866■藤原良房が摂政となる 887■藤原基経が関白となる 894■遣隋使が停止される
	10世紀		935■平将門の乱(~40) 939■藤原純友の乱(~41)
平安時代	11世紀		1016■藤原道長が摂政となる 1069■後三条天皇が荘園の整理を行う 1086■白河上皇の院政が始まる
	12世紀	厚東氏が宇部一帯を治める武士団になる	

原始・古代の宇部をながめるポイント



現在の瀬戸内海沿岸の平野は、ほとんど昔は海でした。厚東川や真締川の河口には遠浅の海が広がり、現在陸地になっている竹の小島や鷺の島、渡辺翁記念会館の北側の島地区などは、名前の通り島でした。際波など、当時海岸だったことを物語る地名も残っています。

作画 中山美由紀

(1) 旧石器時代の宇部

宇部には、いつごろから人間が住んでいたのでしょうか。

旧石器時代には何回かの氷河期がありました。氷河期には海面が今より100m以上も低く、宇部の南側に広がる瀬戸内海も陸地でした。また、氷河期と次の氷河期の間には凍っていた海水が解け海面が上がりました。

そういった旧石器時代の宇部に、いつごろから人間が住んでいたか確かなことはわかりませんが、氷河期の間、日本列島が大陸と陸続きだった時期に、大型の動物を追って、人間が移り住んできたと思われます。宇部各地から東洋象というマンモスに似た象の一種や、古代のサイの化石が見つかっていますし、縄文時代以前の人間のこん跡が発見されているのです。

現在見つかった宇部最古の人間のこん跡は、常盤池周辺や長榊^{ながます}（西岐波区山村）などに見られるおよそ2万年前とみられる生活の跡です。山口県下初の旧石器時代の遺跡と言われた長榊遺跡からは、数多くの打製石器が発掘されています。

旧石器時代の宇部に住んでいた人々は、小高い台地の上の洞窟や小屋に住み、いろいろな道具を巧みに使い、きびしい自然環境の中で生活をしていました。



長榊遺跡から
出土した石器

(2) 縄文時代の宇部

今から1万年ほど前、最後の氷河期が終わり、気候が暖かくなるにつれて自然環境が大きく変化しました。宇部周辺でも動物や植物が変化すると同時に、今よりかなり遠くにあった海がしだいに近づき、現在のような海岸線に落ちてきました。（現在より10数m海面が高くなった時期もあります。）

宇部の縄文時代の遺跡は、おもに東岐波から西岐波にかけて多く分布しています。遺跡からは、いろいろな形の打製石器や、縄文土器、^{たてあな}竪穴住居の跡などが発掘されています。

縄文時代の宇部に住んでいた人々は、月崎遺跡（東岐波区月崎）のような海ぞいに住み、狩りや採集を続けながらも、おもに漁によって魚や貝などの食料を得ていたようです。



月崎遺跡から出土した縄文土器や石器

(3) 弥生時代の宇部

宇部の弥生時代の遺跡は、おもに上宇部北部から川上にかけての地域で発見されていますが、その中でも北迫遺跡（川上^{かきづか}蛸塚）が最大のもので、標高80mほどのこの遺跡からは、長さ14m、最大幅7m、深さ1mで瀬戸内最大と言われる貝塚や、多くの住居跡が発見されています。貝塚からは、アサリ、シジミ、サザエ、カキ、ハマグリなど26種類の貝が見つっています。また、円形と方形（四角形）の二種類の住居跡からは、弥生土器や石おの、稲穂を刈り取るための石包丁、糸をつむぐ^{ぼうすいしゃ}紡錘車、炭化した米粒、小型の金属器、土製のまが玉などが見つっています。

弥生時代の宇部に住んでいた人々は、北迫遺跡のような内陸の小高く日当たりのよい場所に竪穴住居や高床倉庫を建てて住み、川ぞいの低地に下りて稲作をしていたようです。



北迫遺跡



北迫遺跡の貝塚の断面

コラム 発見された中国銭のなぞ

江戸時代の中ごろの1740(元文5)年、市左衛門^{いちざゑもん}という農民が、薪にするための松の小枝を拾いに宇部の海岸を歩いていたとき、砂浜でひとつの古いつぼを見つけました。つぼの中を調べてみると、見たこともないお金がたくさん入っているではありませんか。市左衛門は、すぐに村を治める武士、福原元貞^{ふくばらもとさだ}の所へつぼを持っていきました。

百枚近く入っていたつぼの中のお金は、中国の「半両銭^{はんりょうせん}」や「五銖銭^{ごしゆせん}」でした。「半両銭」「五銖銭」とは中国の漢の時代に作られていたお金です。漢といえば、日本が弥生時代のころの国です。つぼも弥生時代に作られた土器でした。

どうしてそれが宇部の海岸にあったのでしょうか。青銅器の材料として運ばれる途中、船が宇部の沖で沈没したとも考えられます。

つぼとそこのお金は、その後、福原家の家宝として代々受け継がれました。



発見されたつぼと中国銭

(4) 古墳時代の宇部

3世紀ごろから日本各地に古墳がつくられるようになりました。宇部には古墳はあるのでしょうか。また、古墳をつくらせるような支配者はいたのでしょうか。

宇部の古墳は、東岐波・西岐波の海岸ぞいや、真締川まじめがわぞい、吉見から棚井にかけての厚東川ぞいなどから発掘されていますが、最大のものは松崎古墳（藤曲松崎）です。この古墳は、厚東川に向かって突き出た福原山（標高30m）の山頂で、1969（昭和44）年、工事中に偶然発見されました。松崎古墳は直径27mの円墳で、長さ約2.8mの石棺が発掘されました。この石棺は、現在旧宇部市立図書館の構内に復元してあります。

内部を朱で塗られた石棺の中からは、銅鏡3枚、まが玉9個、管玉くだたま14個の他、鉄製の武器や農具が出てきました。銅鏡のうちの1枚は「三角縁神獣鏡さんかくぶちしんじゅうきょう」とよばれるもので、中国製の「三角縁神獣鏡」をモデルに日本でつくられたものでした。「三角縁神獣鏡」とは、邪馬台国の卑弥呼が魏の国から百枚もらったとされる銅鏡ではないかと考えられているものです。それをモデルとしてつくられた銅鏡が、松崎古墳から出てきたということは、邪馬台国とつながりのある支配者が宇部一帯を支配していたのかもしれません。



松崎古墳から出土した三角縁神獣鏡

コラム 宇部にも来た？ 渡来人

古墳時代には、朝鮮半島や中国から一族でまとまって日本へ移り住み、新しい文化を伝えた人々がいました。宇部にはそういった渡来人は来なかったのでしょうか。

宇部の西のはし東須恵あたりでは、昔、須恵器を焼いていたと言われています。山口県下でもっとも早く須恵器作りが始まったのは小野田の本山周辺といわれており、そのあたりには須恵という地名が残っています。宇部の東須恵も当時は竜王山にむかって伸びていた細長い半島の一部で、ここで須恵器を焼いていたのも渡来人だったのかもしれません。

須恵器作りの跡は、東岐波の花ヶ池窯跡でも発掘されています。東岐波では、波雁ヶ浜周辺で塩作りの跡もたくさん見つかっています。このあたりでは小規模な古墳がたくさん見つかっており、須恵器作りや製塩など新しい技術をもった渡来人が移り住んだ場所だったのかもしれません。



花ヶ池窯跡

宇部遺跡マップ

- ・・・旧石器～縄文時代のおもな遺跡
- △・・・弥生時代のおもな遺跡
- ・・・古墳時代のおもな遺跡
- ⊗ 中学校
- 市境
- 現在の海岸線
- 古墳時代ころの海岸線（推定）
- おもな川



弥生土器（北迫遺跡）



まが玉（若宮古墳）



耳環（若宮古墳）

コラム 日ノ山は国の通信設備だった

宇部市の東端に位置する日ノ山（東岐波区日ノ山）は、古代大事な役割をもっていました。大化の改新を行った中大兄皇子は、新羅の攻撃にそなえて「飛ぶ火」の制度を定めました。「飛ぶ火」とは、九州から奈良まで、山から山へと狼煙のろしで合図を伝える通信のしくみです。九州から伝わってきた合図は、下関の火ノ山、山陽小野田市津布田つぶたの火の山、同じく山陽小野田市の竜王山と伝達され、宇部の日ノ山から秋穂あきほの筈倉山はずくらやまへと渡されました。「飛ぶ火」といっても火を燃やすのではなく、山の頂上で狼のフンを乾かしたものを燃やしたそうです。白い煙が出て、夜でも月の明かりで光ったと言われています。電話などがない当時、最新の通信設備だったと思われます。

結局、このとき新羅は攻めてきませんでした。しかし、その後も日ノ山は狼煙を上げて合図を送る山として使われました。また、付近の人々が毎晩交代で火を燃やし、灯台の役目を果たしていたようです。頂上しろひげの白髭社を地元の人は「焚く火神社」と呼んでいます。

(5) 律令国家の成立と宇部

古墳時代の間は大和国家の大王は倭の王としての地位を固め、聖徳太子の政治や大化の改新をとおして、次第に律令国家としてのしくみを整えていきました。そして、701(大宝元)年につくられた大宝律令では全国を支配するしくみが細かに定められました。こうした動きの中、宇部はどういうようすだったのでしょうか。

律令制度のもと、地方は国に分割され、各国の中は郡に分けられ、さらに各郡はいくつかの里に分けられました。次のページの地図を見てわかるように、現在の山口県の位置には、長門国と周防国があり、長門国には阿武郡あぶぐん・大津郡おおつぐん・美禰郡みねぐん・厚狭郡あさぐん・豊浦郡とようらぐん、周防国には吉敷郡よしきぐん・佐波郡さばぐん・都濃郡つのぐん・熊毛郡くまげぐん・玖珂郡くがぐん・大島郡おおしまぐんがありました。現在の宇部市域は、当時周防と長門のちょうど国境に位置していました。東岐波・西岐波は周防国の吉敷郡の一部、それ以外は長門国の厚狭郡の一部にあたります。

郡の中の里(のちに郷と改称)については、はっきりわかりませんが、平安時代の記録では、厚狭郡には、見穂みほ・小幡おはた・厚狭あつさ・久喜くき・二処ふたい・神戸かんべ・駅家うまや・良田よしだ・松室まつやの九つの郷が、また、吉敷郡には、八田やた・宇努うの・仲河なかがわ・益必やけひと・広伴ひろとも・神前かむぎ・多宝たほ・八千やち・賀宝かがほ・浮囚ふしゅうの十の郷があったとあります。これらの里のうちいくつかは今の宇部市のどこかであるはずですが、各里の人々は、郡司や国司に支配され、与えられた口分田を耕し、租そ・庸よう・調ちよう・雑徭ぞうよう・兵役へいえきなどの負担をおいながら生きていました。

また、この時代には全国各地を結ぶ道が整備されました。特に瀬戸内海岸を通る山陽道は、近畿と九州を結ぶ重要な道でした。道の要所には駅がつくられ、宿泊施設や馬の配備がされましたが、現在の宇部市域を通る山陽道には阿潭あたみという駅があったという記録があります。阿潭は、現在の厚東区吉見の温見のあたりと考えられています。

古代の周防・長門の地図



(6) 厚東氏の登場

平安時代の中に世の中がだんだん乱れ、地方の政治は国司にまかせきりになっていきました。律令政治のしくみがくずれ、班田収授も行われなくなり、租・庸・調の税や雑徭・兵役などの農民の義務も変化していきました。国内に貴族や寺社などの私有地である荘園が増えてくると、国司は税を確実に集めるために、国内の郡を今までよりも小さく分け、その地域の豪族を郡司にしました。

地域の豪族とは、代々郡司をしてきた一族や有力な農民、国司として地方に来た貴族でそのまま住み着いた人たちでした。そういった豪族は、郡司として国司と結んだり、荘官として中央の貴族や寺社と結んで勢力を築いていきました。そして、各地の豪族たちはたがいにきそい合い、武芸を身につけ武士になっていきました。

厚狭郡は2つか3つに分けられたと思われませんが、その1つが厚東郡です。厚東郡は、厚狭郡の東部、現在の宇部市と山陽小野田市にまたがるものであったようです。

その厚東郡の郡司として、また、長門国内でも有力な武士として勢力をのばしていったのが厚東氏です。厚東氏は厚東の棚井に屋敷を築き、平安時代後半から南北朝時代まで、17代にわたって力をふるいました。厚東氏の出身については、はっきりとしたことはわかりませんが、10世紀中ごろ長門の国司としてやって来た物部宿禰本与^{ものべのすくねもとよ}という貴族が、任期後厚東に住み着き、厚東氏と名乗るようになったのではないかという説があります。